

2017年ウクライナとの交流から、いま

豊橋創造大学短期大学部 幼児教育・保育科 准教授 加藤克俊



1. はじめに

私は保育士や幼稚園の先生を目指す学生に造形科目を教えており、学生に見せるため、例年ぺんてる株式会社から世界の児童画をお借りしている。幸田町にあるギャラリーにて、ウクライナの子どもの絵の展示をしていた事を知り、それらはチェルノブイリ救援・中部からお借りすることができると知った。また「菜の花プロジェクト」というものもその時に知った。菜の花は渥美半島一帯によく見られる風景だったため、何か縁を感じたのかもしれない。それが2017の初めぐらいの事だと記憶している。

会津大学短期大学部に大学時代から良く知る教員（葉山先生）がいたため、菜の花をテーマにした児童画の展覧会の企画を相談すると、福島復興支援事業と絡めてやっていきたいと思いますということになり、当初は豊橋-福島をつなげる企画として動き出したが、やはりウクライナもつなげようということになり、チェルノブイリ救援・中部に、ジトーミルの Chernobyl Hostages Fund ドンチェヴァ氏を紹介していただいた。

福島に展示巡回する際に、何か一連の活動をかたちとして残せないかと考え、ウクライナでも実施するのであれば日本的な絵巻物の表現が面白いのではないかと考えた。ロール紙の色については、菜の花畑を描くなら水色かなと何となく決めたが、菜の花の黄色と、水色の空でウクライナの国旗になると、後になって気づいた。

2017年においてもウクライナ東部では爆破があったり、治安が悪くなっているニュースは流れていたりした。しかし私が訪れた場所、出会った人々は皆、穏やかで優しく、チェルノブイリ原発事故の犠

犠牲者の事を想いながらも、福島原発事故を憂いてくれる人たちであった。現在ウクライナはロシアの侵攻によって世界中から注目を集めている。このような形で耳目を集めることになってしまった事は本当に悲しい事だが、私がやってきたことや、手元にあるものを見ていただくことで、ウクライナで傷ついた人々への関心と支援に繋がればと思っている。

2. ちいさな黄色い手紙プロジェクト



ちいさな黄色い手紙プロジェクトは 2017 年に NPO 法人チェルノブイリ救援・中部と豊橋創造大学短期大学部（豊橋市明照保育園）、会津大学短期大学部（会津若松に避難している大熊町の子ども）との連携により、ウクライナ、豊橋市、大熊町の子どもが絵によって交流する活動であった。原発事故によって被災した地域を活かすための事業として進められている「菜の花プロジェクト」は、放射性物質が移行していない食用油や、ディーゼル油、メタンガスを作り出すものであり、そうした菜の花の効用を広める意味もあった。

豊橋市（渥美半島一帯）の春は、あちこちに菜の花のある風景が見られ、子どもたちにとっても親しみのある花の一つである。「菜の花プロジェクト」を広く知ってもらうとともに、子どもたちののびのびとした表現活動に触れることで、希望ある未来を感じてもらいたいという思いが発端となった。

主なタイムライン

●2017.4.26

4月頭にチェルノブイリ救援・中部と企画について相談し、ご協力いただく事が決まった。展覧会の実施のため、明照保育園にて菜の花の絵を描いていただくよう依頼し、事前に子どもたちにはウクライナと福島についてのお話もした。2年生加藤ゼミが明照保育園に出向き、年長児の制作を補助。



●2017.6.19-7.23

「ちいさな黄色い手紙展（豊橋創造大学）」開催
明照保育園、年中長児 111名の作品、年少児 52名による協同作品1点、チェルノブイリ救援・中部所蔵のウクライナの子どもの作品 16点、大熊町の子どもの作品 1点を展示。



●2017.10.24

ワークショップ「菜の花畑を描こう」実施
明照保育園を起点に菜の花畑の絵巻物を豊橋ー福島ーウクライナへとつなげていく。2017年はウクライナと日本の交流 25周年の節目ということで、「日本の年」として様々な行事を計画しているとのことだった。年少児を対象に実施した。



●2017.10.31

冊子「ちいさな黄色い手紙プロジェクト」発行
プロジェクトの概要と明照保育園の子どもの作品をウクライナ語訳も添えて編集。作者や展示会場など関係各所にて配布。



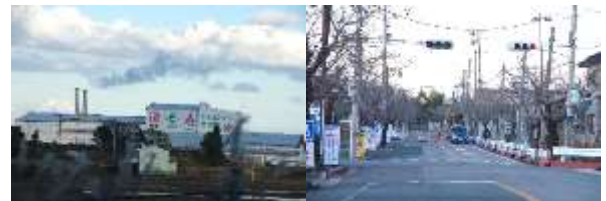
●2017.11.4-23

「ちいさな黄色い手紙展（福島県立博物館）」開催
豊橋にて展示した作品に加え、会津大学短期大学部との連携により会津に避難している大熊町の子ども達、大熊町立大野小学校、大熊町立熊町小学校、大熊町立大熊中学校から計 56点の作品をお借りし、追加展示した。



●2017.11.16

Fスタディツアーに参加
いわき湯本の古滝屋が開催するツアーに参加。富岡町のできたばかりの駅舎や、焼却施設周辺、帰還困難区域境界などを見学。ガイド、運転は古滝屋館主の里見氏にしていた。



●2017.11.13-14

ワークショップ「つないで描く絵巻物」実施
豊橋からつながる菜の花畑の絵巻物を、大熊町立小学校（熊町小・大野小）にて低学年児童とともに制作し、翌日は高学年児童とともに制作した。



●2017.11.18

ワークショップ「つないで描く絵巻物」実施
大熊町の子どもの作品に続いて、福島県立博物館にて一般募集を掛け、集まった子どもと菜の花畑を描いた。愛知県での 10mに加えて、福島県で 10mの絵巻物が完成した。



●2017.12.9

チョルノーベリ原発と周辺の町を視察
SOLO EAST TRAVEL による 1day ツアーに参加し、キーウから北に 135 キロ離れたチョルノーベリ原発に向かった。老朽化した石棺をドームで覆う工事が 2016 年 11 月に完了したばかりであった。放射性物質は地面に溜まり易く、汚染された土壌は今もまだそのままである。



●2017.12.10

キーウ市内散策
キーウの地下鉄は世界一深く作られていると言われている。最も深い駅は地下 105m。ロシアの地下鉄も深く作られており、もともとシェルターとしても利用できるような作られている。



●2017.12.11

ジトーミルに移動
チョルノーベリ人質基金 Chernobyl Hostages Fund のドンチェヴァ氏と合流。事前に送った児童画約 150 点はジトーミル青少年芸術センター、第 12 小学校、第 25 小学校、ナロジチの SUN 幼稚園、オヴルチの第 3 小学校に分配展示された。



●2017.12.11

ワークショップ「菜の花畑を描こう」実施 第 12 小学校にて 6-8 歳児 14 名
子どもたちは 1 か月前から我々の訪問のために準備をしてくれていて、菜の花の絵や歓迎のセレモニーをしてくれた。



●2017.12.12

ワークショップ「菜の花畑を描こう」実施 第 25 小学校にて 6-8 歳児 24 名
作品の上下から描画することで、結果的に個人の空間の境界を曖昧にし、連続した空間を描き、菜の花畑が作品となって表れた。最後に加藤、葉山が授業にて学生に作ってもらったクリスマスカードをプレゼントした。



●2017.12.12

ワークショップ「菜の花畑を描こう」実施 ジトーミル青少年芸術センターにて 6-8 歳児 12 名
「ちいさな黄色い手紙展」は 2018.3 まで開催されることになっており、アートを学んでいる子どもたちの作品とともに日本の子どもの作品が展示された。



●2017.12.13

ナロジチ地区 SUN 幼稚園訪問
ナロジチは原発から西に直線で約 80km の位置にある町。SUN 幼稚園は事故の 7 年後に再開され、現在に至っている。歓迎会の後、日本からの支援物資を中心に、園環境を拝見した。幼稚園では窓を飾る切り紙が多く見られた。



●2017.12.13

ワークショップ「菜の花畑を描こう」実施 第 3 小学校にて 6-8 歳児 13 名
ナロジチから西に 20km。オヴルチ地区の第 3 小学校ではこれまでの絵巻物のワークショップに加え、切り紙によって蝶を作り、装飾した。ここで用意したロール紙を使い切り、40m の絵巻物が完成した。



●2017.12.14

「事故処理作業者の日」式典参加
ウクライナでは死者との別れは 2 本のカーネーションを捧げる。原発事故にてジトーミルから駆り出された多くの犠牲者の慰霊式典に参加した。当時現場作業員を采配したチュマク氏から、お話をいただくこともできた。写真に写る同僚たちの半数は今、会うことはできない。



●2019.12.23

ウクライナ Xmas ミーティング
ドンチェヴァ氏からの提案で、第 25 小学校の子どもと豊橋創造大学の学生を Skype でつなげようという事になった。子どもたちは得意な歌や絵を見せてくれ、学生たちは手遊びや演奏をした。



●毎年 12 月

Xmas カード交換
ジトーミルの子どもたちとは毎年 Xmas カードを贈り合っている。贈ったポップアップカードの仕掛けが、翌年に子どもたちからのカードに採用されているといった交流も見られた。写真は 2021 年のもの。



●2022.3.4

2022 年 2 月 24 日に勃発したウクライナ侵攻。以前訪問したジトーミル第 25 小学校はロシア軍の爆撃を受けた。すでに避難勧告が出ていたため、負傷者はいないと聞く。しかし、その後の子どもたちやその家族についての情報は無い。



●2022.4.18-5.9

こいのぼりをつくろう！
例年 1 年生の授業でクラス毎に制作している 4m のこいのぼりを、今年は青と黄色をキーカラーにして作ることにした。学生たちは自分なりにウクライナについて調べ、描くモチーフを決めていった。



●2022.6.4-26

ちいさな黄色い手紙展 2022 開催
ロシアのウクライナ侵攻を受け、これまでの活動を展示紹介することを思い立った。テレビの向こう側の話だったことを、より近くに感じてほしいという思いでもある。これまでに制作した絵巻物や、いただいた絵などを展示した。



●2022.6.4

黄色い花畑をみんなで描こう！
展覧会初日のイベントとして開催。2017 年に豊橋、福島、ウクライナとつなげた絵巻物。その続きとなる花畑を 10m のロール紙に描いた。描いた作品は、ほかの作品とともに展示をした。コロナ対策として、鉛筆線で紙を区分けし、間隔を空けながら制作をした。



●2023.1.23

絵巻物が届く
チョルノービリ人質基金にクリスマスカードとともに、6 月 4 日に描いた絵巻物を送っていた。それがジトーミル青少年芸術センターにて公開された。当初は送る予定はなかったが、ワークショップの参加者から、絵巻物はどうなるのか尋ねられ、届けることにした。



3. ウクライナの子どもたちを想って



※Хай буде мирна Україна. ウクライナが平和になりますように。

私の授業では、入学してすぐに協同制作の課題として、授業3回で4mのこいのぼりをクラス毎につくることにしている。人間関係が構築されていない状況で、いかにして自分の意見や得意なことを制作に活かせるか、社会でも求められる能力を実践的に学んでいる。2022年の4月、例年であれば



こいのぼりの図案は自由に話し合いをさせて決めていたが、ウクライナの国旗である黄色と青をキーカラーに使うように伝えた。学生たちはそこからウクライナについての情報を自然と調べ、ウクライナ語や、建物などモチーフに使えないか検討していた。日ごろから浴びているウクライナに関するニュースから、ウクライナという国への関心は、いつの間にか高まっていたのかもしれない。授業課題のテーマとしてそうしたものに絡めることで、積極的に情報を得ようとする動きが見られた。制作したこいのぼりは屋外で展示し、ドンチェヴァ氏にSNSを通じて見てもらい、こいのぼりが子どもの健やかな成長を願ったものであることを説明した。また、ちいさな黄色い手紙展においても、展示した。

4. つながっている世界



ウクライナの子どもたちは、小学校においてすでに透視図法を学んでいた。技術的なことをとにかく先に教えるようで、見本を真似るよう指導し、教科書もそのように作られていた。日本は逆に技術的なことよりも、作りたい気持ちや、表現することの楽しみを育む教育だろう。これまでぺんてる株式会社からお借りしてきた世界の児童画で、大人びた絵が国によって特徴的に見られたのは教育方法の違いなのかと納得した部分があった。絵巻物のように、一つの画面にみんなで描くといった活動もしたことがなかったようで、第 12 小学校では、虹を最初に描いて自分のスペースを確保し、その中で絵を描く様子がいくつも見られた。教育はそれぞれのやり方があり、時代、土地、教える側、受け取る側によって変わる。価値観とも似た概念ではないか。

2017 年から続くクリスマスカードの交換。2021 年は侵攻前にウクライナから届き、感謝の手紙も添えられていた。まもなく空港が攻撃され、戦争状態に発展。ジトーミルでも爆撃がされるようになった。2022 年は、クリスマスカードの交換ができるかどうかもわからず、とにかく日本側からは子どもたちのためにと思い、送る準備をし、ウクライナからも何とか届いた。事前に発電施設が攻撃され、停電が断続的に続いていること、今回は（学生の）人数分用意できないかもしれないことは聞いていたが、



それでも数を用意していただいていた。モチーフは思ったほど暗いものではなく、キラキラしたシールやちょっとした装飾が貼られていて、私たちの幸せを願うメッセージが書かれていた。学生たちはテレビの向こう側の人たちからカードが届いたことで、そこに生きる子どもたちの体温を感じたようだった。

現代の日本人にとって、死が身近な状況というのはイメージしにくいだろう。いや、そんなことは無い。2011年東日本大震災、2004年中越、1995年阪神・淡路など、多くの命が亡くなる出来事は起きている。しかし我々はそれを伝える数字しか見ない。死が身近であるはずなのに、見ないようにしている。当事者でない限り、心を痛めることもないだろう。青少年芸術センターの子どもは、チェルノブイリ原発事故について、非常に痛ましい惨劇の様子を描いていた。1986年の出来事にも関わらずである。それは大人たちがそういった悲しみを伝え続けているのかもしれない。また、そういった悲しみを描き残すことに価値を見出す評価をしているのかもしれない。日本では、東日本大震災について覚えている子どもはほとんどいないといわれている。負の記憶について子どもに刷り込む必要はないという考え方も分かる。しかし、ウクライナ的に当時の悲しみを後世に伝え、受け止めさせるという価値観にも、学ぶべきものがあると感じた。日本はウクライナについてどれほど親身になれるだろうか。テレビの向こうがつながっている世界であることを、学生たちに気付かせていきたい。